

わたしたちの

だから、大好き。

2026
9
22
火 祝
11
15
日



Renoir and Japan

ルノワール

日本が愛した、幸せの画家

【休館日】毎週月曜日 ※ただし、10月12日(月・祝)は開館、翌10月13日(火)は休館 【開館時間】10:00～19:00 (展示室入場は閉館の30分前まで)

【観覧料】一般 1,600(1,400)円／大高生・70歳以上 1,200(1,000)円／中学生以下無料 ◎お得な一般前売ペアチケット2枚1組:2,600円

※()内は前売および当日に限り20名以上の団体料金 ※障害者手帳、特定医療費(指定難病)受給者証、小児慢性特定疾病医療受給者証等をご持参の方および必要な付添の方1名は無料

◎前売券・一般前売ペアチケット: 8月7日(金)から9月21日(月・祝)まで販売 取扱場所:【前売券】静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、ローソンチケット[Lコード:43027]、セブンチケット[セブンコード:116-017]、チケットぴあ[Pコード:687-492]、谷島屋(ハルシェ店、マークイズ静岡店、流通通り店)、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店、戸田書店江尻台店、中日新聞販売店

【一般前売ペアチケット】静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、ローソンチケット[Lコード:43027]、セブンチケット[セブンコード:116-016]、チケットぴあ[Pコード:687-491]、中日新聞販売店 ※当日ペアチケットの販売なし

【主催】静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、テレビ静岡、中日新聞東海本社 【特別協力】公益財団法人ボラ美術振興財団 ボーラ美術館

【協力】株式会社トーダン、株式会社リョーユーバン 【企画協力】TNCプロジェクト 【後援】在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ 【静岡展特別協賛】セキスイハイム東海



静岡市美術館
SHIZOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F
tel. 054-273-1515 (代表) www.shizubij.jp



当館HPはこちら

セキスイハイム東海



わたしたちの ルノワール

日本が愛した、幸せの画家

ルノワール作品39点、
今秋、静岡市美術館へ。

●開催概要

フランス印象派を代表する画家・ピエール＝オーギュスト・ルノワール(1841-1919)。幸福な雰囲気満ちた作風が日本でよく知られ、最も愛されている画家の一人です。わが国でルノワールが親しまれる理由は、今日多くの美術館でその作品を直接観ることができるからともいえるでしょう。本展では、日本国内に所蔵されているルノワールの作品39点を、梅原龍三郎(1888-1986)や山下新太郎(1881-1966)ら彼を敬愛した日本近代洋画家の作品や、モネやセザンヌといったフランス近代美術の巨匠たちの作品と共に紹介、あわせて約80点を展示します。加えて、ルノワールを取り上げた雑誌や企業CM、カレンダーなども紹介することにより、遠い異国の画家であったルノワールが日本で広く親しまれ、身近な画家となるまでの軌跡を辿ります。わが国が誇る至高のルノワール・コレクションをご堪能ください。

■会 期： 2026年9月22日(火・祝)－11月15日(日)(計48日間)

■休 館 日： 毎週月曜日※ただし、10月12日(月・祝)は開館、翌10月13日(火)は休館

■開館時間： 10:00－19:00(入場は閉館の30分前まで)

■観 覧 料： 一般1,600(1,400)円、大高生・70歳以上1,200(1,000)円、中学生以下無料

◎お得な一般前売ペアチケット2枚1組2,600円

* ()内は前売および当日に限り20名以上の団体料金

* 障害者手帳、特定医療費(指定難病)受給者証、小児慢性特定疾病医療受給者証等をご持参の方および必要な付添の方1名は無料

■前 売 券： 8月7日(金)から9月21日(月・祝)まで以下にて販売

[前売券] 静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、ローソンチケット(Lコード43027)、セブンチケット(セブンコード116-017)、チケットぴあ(Pコード687-492)、谷島屋(パルシェ店、マークイズ静岡店、流通通り店)、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店、戸田書店江尻台店、中日新聞販売店

[一般前売ペアチケット] 静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、ローソンチケット(Lコード43027)、セブンチケット(セブンコード116-016)、チケットぴあ(Pコード687-491)、中日新聞販売店 ※当日ペアチケットの販売なし

■主 催： 静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、テレビ静岡、中日新聞東海本社

■特別協力： 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

■協 力： 株式会社トーダン、株式会社リョーユーパン

■企画協力： TNCプロジェクト

■後 援： 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ

■静岡展特別協賛： セキスイハイム東海

展覧会見どころ

1

日本国内のルノワール作品 39 点が しずびに大集合！

本展では、ポーラ美術館所蔵の《レースの帽子の少女》(1891 年)をはじめ、日本各地の美術館や企業、個人が所蔵するルノワールの作品が一堂に会します。西洋絵画への関心が高まる明治・大正期から現代までにもたらされた数々の作品を通して、日本人にとってルノワールが誰もが知る画家になるまでのあゆみを通覧します。各美術館の至宝として守り伝えられている貴重なルノワール作品が静岡市美術館でまとめて観られるこの機会を、ぜひお見逃しなく！

2

日本近代洋画の名品と辿る、 日仏美術交流の軌跡

ルノワールと日本人の関係を語る上で欠かせないのが、梅原龍三郎や山下新太郎といった日本近代の洋画家たちの存在です。彼らは様々な形でルノワールの作品と出会い、時には模写によってその絵画表現を学び、柔らかな光とあたたかな色彩を自らの作品に取り入れました。本展では、約 30 点におよぶ日本近代洋画の名品を 39 点のルノワール作品とあわせて展示し、「日本人洋画家から見たルノワール」という視点を探ります。

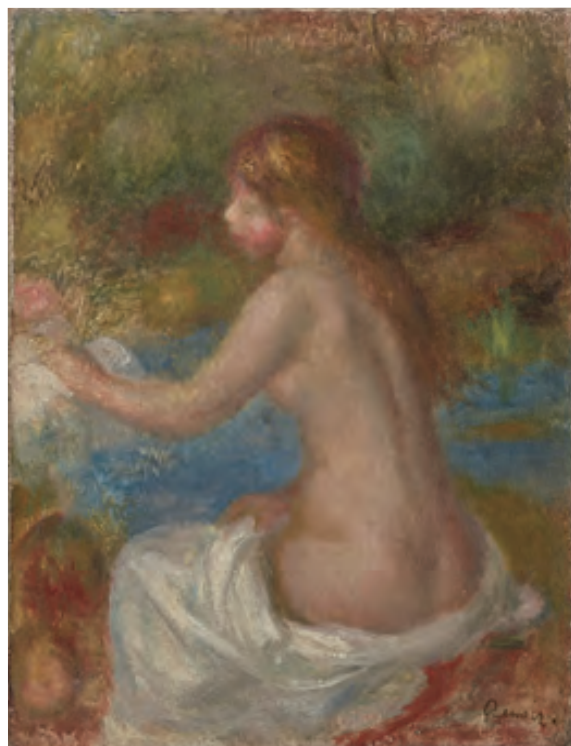
3

モネ、セザンヌなど、 同時代の仲間たちの作品も紹介

今日の日本では、ルノワールだけでなく数々の印象派・ポスト印象派の画家たちが親しまれています。本展第 3 章では、日本が誇る充実したフランス近代絵画のコレクションから、印象派、ポスト印象派の画家による風景画 13 点を展示します。モネ、シスレー、セザンヌなど、ルノワールとともに新たな絵画表現を追い求めた画家たちの魅力をご堪能ください。

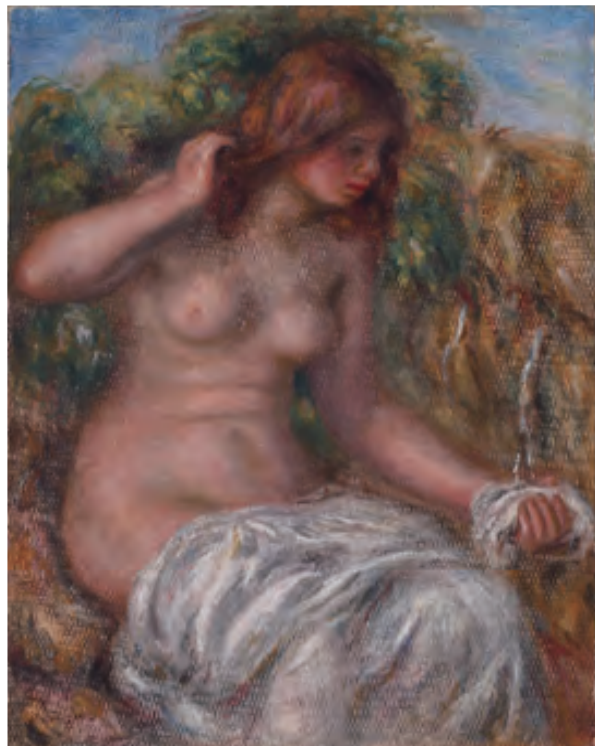
1 ルノワールとの出会い

1912年に
日本で初めて展示された
ルノワールの絵画



《水浴の女》、1907年頃、油彩・カンヴァス、石橋財団アーティゾン美術館

洋画家・満谷国四郎の依頼で制作され、
日本へ持ち帰られたルノワール作品



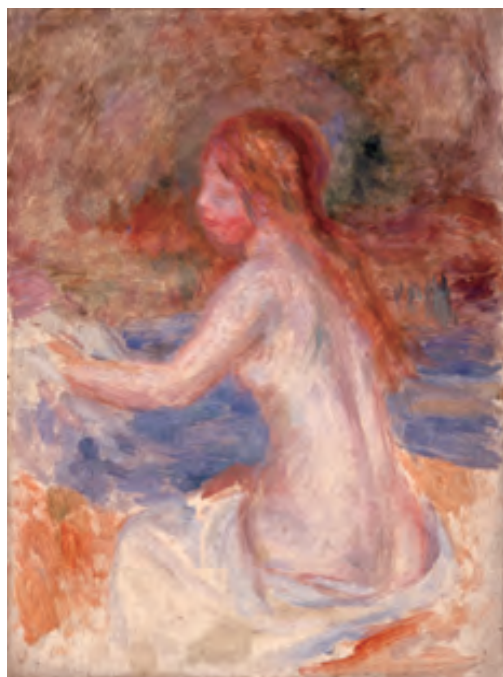
《泉による女》、1914年、油彩・カンヴァス、公益財団法人大原芸術財団 大原美術館

日本に初めてルノワールの作品がもたらされたのは1890年代、購入者は明治期にヨーロッパで活躍した美術商・林忠正(1853-1906)であったといえます。ヨーロッパの新しい美術動向に対する関心が高まりつつあったこの時代以降、同地に渡った人々によって、ルノワールの作品は少しずつ日本へもたらされることになります。

1900年代、すでにフランスで画家としての地位を確立していたルノワールは、関節リウマチなどの深刻な持病を抱えながらも旺盛な制作活動を続けていました。その作品は、フランスに留学しルノワールに傾倒した梅原龍三郎や山下新太郎ら若き画家たちや、ヨーロッパの美術を日本に紹介したいという志を抱いた松方幸次郎(1866-1950)をはじめとする実業家たちによって入手され、日本に届けられます。それらの作品は、西洋の名画を紹介する展覧会や雑誌などでも取り上げられ、フランスの画家ルノワールの存在は、現在進行形の美術動向として国内でも徐々に知られるところとなります。本章では、最初期に日本にもたらされたルノワールの作品を、画家や作品について言及した雑誌記事などの資料とともに展示します。

ルノワール先生。

2 ルノワールと日本の洋画家たち

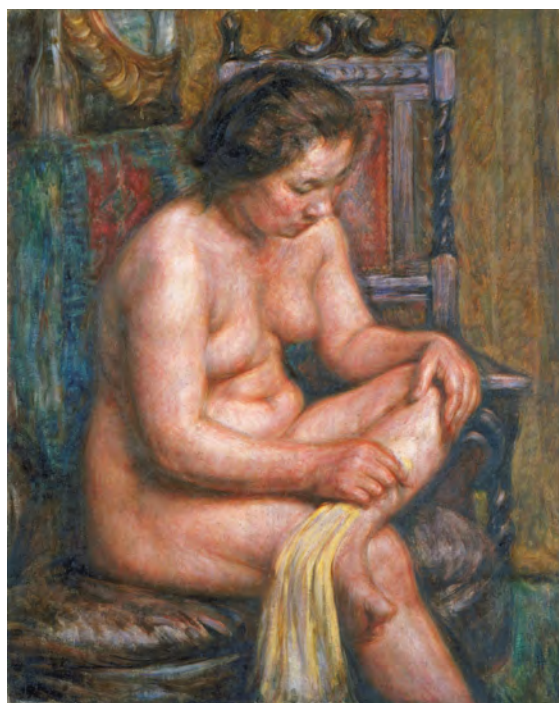


黒田清輝、《ルノワール作「水浴の女」の模写》、1910年、油彩・カンヴァス、福岡県立美術館



児島虎次郎、《芝の上》、1914年、油彩・カンヴァス、公益財団法人大原芸術財団 大原美術館

1908（明治41）年、留学のためフランスに渡った梅原龍三郎は、パリ到着の翌朝にリュクサンブール美術館で目にしたルノワールの作品に強い衝撃を受けます。翌年、南仏の町カーニュ＝シュル＝メールにルノワールを訪ねた梅原は、老大家となっていた画家に温かく迎え入れられ、二人は国を超えた師弟関係を結ぶことになります。ルノワールの教えに奮い立ち、その芸術に大いに学んだ梅原。しかし帰国後には偉大な師と自らの目指す表現との間で揺れ動き、模索の時期を過ごします。やがて梅原は独自の鮮やかな色彩と奔放な筆致を確立しますが、晩年の作品にみられる豊かな色彩感覚には、その芸術の根底にあり続けた、師ルノワールの教えを感じ取ることができます。



中村彝、《裸体》、1916年、油彩・カンヴァス、茨城県近代美術館

また、梅原を介してルノワールと知り合った山下新太郎や、実業家の大原孫三郎（1880-1943）に進言してその作品を買い求めた満谷国四郎（1874-1936）、また同人誌『白樺』や画集などで間接的にルノワールの作品を知った中村彝^{つね}（1887-1924）らも、やはりその芸術に多大な影響を受けたと言われます。本章では、同時代人としてルノワールに触れた日本人画家たちの作品を紹介することで、彼らがルノワールの芸術から何を感じ、何を学び、そして自らの制作にどのように取り入れたのかを概観します。

明るく、あたたかな絵を求めて

3 印象派の時代



アルフレッド・シスレー、《サン・マメスのロワン河畔の風景》、1881年、油彩・カンヴァス、鹿児島市立美術館



クロード・モネ、《海辺の船》、1881年、油彩・カンヴァス、東京富士美術館 / © 東京富士美術館イメージアーカイブ / DNPartcom



ポール・セザンヌ、《水の反映》、1888-90年、油彩・カンヴァス、愛媛県美術館

ともに過ごした、
同時代の仲間たち

1874年、パリにあった写真家ナダールのアトリエで「画家、彫刻家、版画家などによる共同出資会社展」、いわゆる「第1回印象派展」が開催されました。これは、アカデミックな絵画様式に反発した画家たちによる無鑑査の展覧会でした。ルノワールは、シャルル・グレース (1806-1874) のアトリエで出会った仲間たちとともにその展覧会に参加。大胆な筆致と明

るい色彩で移ろいゆく自然の様子を捉えた彼らの作品は賛否を呼び、批評家ルイ・ルロワ (1812-1885) の揶揄から「印象派」と呼ばれるようになります。

ルノワールは中心メンバーとして1877年の第3回展まで参加しますが、以降は経済的な安定を求めてサロン（官展）に応募し、入選を重ねるようになります。有力な支援者も増え画家として人気を得たルノワールは、印象派の活動から徐々に距離を置くようになりますが、伝統的価値観を打破して独自の表現を探究する精神は、その芸術の中に生き続けます。

その後、展覧会に参加した画家たちの方向性の違いなどから、1886年の第8回展をもって印象派展は幕を下ろします。しかし印象派の画家たちがフランス美術界に投じた一石は、やがて日本を含めた世界中の美術界を巻き込み、その歴史を大きく変えていくことになるのです。本章では、クロード・モネ (1840-1926)、アルフレッド・シスレー (1839-1899)、カミーユ・ピサロ (1830-1903)、ポール・セザンヌ (1839-1906) の風景画を紹介します。



そして、わたしたちのルノワールへ



《ルーベンス作「神々の会議」の模写》、1861年、油彩・カンヴァス、国立西洋美術館



《アルジャントウイユの橋》、1873年、油彩・カンヴァス、上原美術館



《レースの帽子の少女》、1891年、油彩・カンヴァス、ポーラ美術館



《胸に花を飾る少女》、1900年頃、油彩・カンヴァス、熊本県立美術館



《モーリス・ドニ夫人》、1904年、油彩・カンヴァス、公益財団法人諸橋近代美術館

柔らかな色彩と筆致で描き出した豊麗な裸婦、流行の装いに身を包んだ可憐な少女たち、そして何気ない日々を謳歌する人々。現在、ルノワールの作品は日本各地の美術館に収蔵されており、わたしたちはその芸術に気軽に触れることができます。

日本に美術館が多く設立された戦後から平成にかけて、高度経済成長やバブル経済の追い風のもと日本には多くのルノワール作品が集まります。さらに全国各地でルノワールの名を冠した展覧会が開催され、その作品は雑誌やテレビ、広告などの様々なメディアでも取り上げられるようになります。今や大衆の知るところとなったルノワールは、日本で最もポピュラーな画家の一人としての地位を築くことになるのです。

なぜ、わたしたちはルノワールとその作品に親しみを感じるのでしょうか。本章では、日本各地の美術館、企業、個人所蔵者の協力のもと、国内に所在するルノワール作品を一堂に集めて展示します。また、絵画や彫刻作品だけでなく、雑誌やカレンダーなどの様々な媒体に登場するルノワール作品も紹介することで、画家とその作品が日本に浸透していくまでの、いわば「わたしたちのルノワール」となるまでの道のりを辿ります。

誰
家
も
に
が
知
る
ま
で

関連イベント

1.

講演会「日本におけるルノワール受容 ー裸婦の画家から幸福の画家へー」

日時：9月26日(土)14:00～15:30(開場 13:30)

講師：三浦篤氏(大原美術館館長、國學院大學教授、東京大学名誉教授)

会場：静岡市美術館 多目的室

参加料：無料

定員：70名(応募多数の場合は抽選)

申込締切：9月10日(木)必着

2.

講演会「梅原龍三郎とルノワール 出会いと友情」

日時：10月12日(月・祝)14:00～15:30(開場 13:30)

講師：嶋田華子氏(美術史家、梅原龍三郎曾孫)

会場：静岡市美術館 多目的室

参加料：無料

定員：70名(応募多数の場合は抽選)

申込締切：9月24日(木)必着

3.

当館学芸員によるスライドトーク

日時：10月24日(土)、11月7日(土)14:00～(各回40分程度)

会場：静岡市美術館 多目的室

参加料：無料

※申込不要、先着順。当日会場へお越しください。

静岡展限定プレゼント企画！

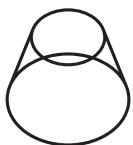
9月22日(火・祝)～9月30日(水)の15時以降に本展をご観覧の方、
各日先着50名様に静岡展限定のオリジナルグッズをプレゼント！

※9月28日(月)は休館日です。

※他のプレゼントとの併用不可。

※本展をご観覧の方に限ります(1名につき1つ)。

※再入場の方は対象外となります。



静岡市美術館
SHIZUOKA CITY
MUSEUM of ART



《電車》 JR静岡駅北口より地下道を利用して徒歩3分
静岡鉄道新静岡駅より徒歩5分

《新幹線》 東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約1時間
新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約2時間

《車》 東名静岡ICより約15分
※お車でお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。

《空路》 富士山静岡空港より静鉄バス
(静岡エアポートライナー)で約1時間

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F
tel. 054-273-1515(代表) www.shizubi.jp